

令和四年度 道伝えの日 お月見歌会 入選歌

課題歌「月」

〔雁部貞夫先生選〕

- 二七、さらさらとやさしくかろく手にふるる新米をとぐ神無月の夜
小林 伸江
新米をとぐ時の形容に「さらさらとやさしくかろく手にふるる」と、もの柔らか
にしかも敬虔な心を詠んだ。炊いた新米は先ず神前に捧げるのであろう。
- 四二、わが孫の月満ちまさに生れむか九天四海をその身に秘めて
今野 英山
今まさにこの世に生れ出て来ようとする孫を祝福する歌。「九天四海」は全宇宙、
全世界の意。スケールの大きな男の歌だ。

互選「一 席」

- 三九、平らかに月の光は照らせども今宵シエルターに潜む人あり
小林 伸子

互選「二 席」

- 二四、忘れること次第に増えし父と二人ばかり浮かぶ月を眺むる
横山 美保子

互選「三 席」

- 二七、さらさらとやさしくかろく手にふるる新米をとぐ神無月の夜
小林 伸江
- 三四、吾の中にかなる獣が潜むのか振り返りつつ『山月記』読む
片岡 和代

自由歌

〔雁部貞夫先生選〕

- 一一、葉をくぐりすず風通る山城の林に腰掛けへりの音聞く
田中 彰
格別に目新しい語句や発想ではないが、自然な落ちついた味わいがある。山国飛
騾の持つ歴史や文化の流れが、「へりの音」の持つ現代性と響き合っている。
- 二六、おほどかに老いを受け入れ老いを超え永遠の命に日々生きるなり
大下 直弘
人生を正面から把らえ、「自然」に順って生き、あわてず騒がず、悠々と過す、
その覚悟を詠んだ。堂々とした古典的風格を示した作。

互選「一 席」

- 三〇、ふりむいて信号待ちのわれに笑む園児を乗せてバス曲がりゆく
細江 和子

互選「二 席」

- 二九、退院の翌朝娘に頼みたる「熱くてしぶいお茶」の一杯
武藤 久美

互選「三 席」

- 三四、受けとればそのまま筒に入れられて見ることのなき卒業証書
片岡 和代



桐山吾朗 選

一席 斐太高等学校 三年 門前 凛音^{もんぜん りんね}

頬染めて結婚報告する先生左手翳して春満月

ご自分の結婚を生徒たちに恥じらいながら告げる教師の姿を印象的に描いている。上の句の良い流れが、下の句で閉ざされている点に再考の余地を残している。

二席 古城高等学校 一年 倉家 るみ^{くらげ}

勉強中母に呼ばれて月を見るホッと一息安らぐ時間

月を見てい心満たされた思いを詠う。心に浮んだままを素直に作詠して、何のけん味もないところがよい。

三席 古城高等学校 三年 伊藤 羽那^{いとう はな}

泣くまいと空見上げれば朧月つくり笑顔にゆれる秋桜

泣き出しそうになる感情をぐっと堪える心境をあたっている。多感な思春期の一面をとらえている。「朧月」と「秋桜」が同等の位置で表現され、焦点が弱くなった。

四席 飛驒神岡高等学校 三年 井上 実咲^{いのうえ みさき}

ゆったりとロッキングチェアは揺れてをり満月の夜に響くララバイ

満月の夜の揺り椅子をうたい、そこに座っていたであろう母子を偲ばせる構成がうまい。ただ、結句の「響くララバイ」が、そこまでの雰囲気にならず齟齬をきたしている。

